

ありよし こうき
有吉 弘樹

法学部 助教
京都大学大学院法学研究科・
博士（法学）
政治過程論

主要な研究業績

□論説 「実践的判断力の政治：カント政治思想の統一的解釈に向けて（一）～（三）」、単著、『法学論叢』177巻、2015年。

□論説：「カント政治哲学における反省的判断力の意義：自然との類比（一）～（二）」、単著、『法学論叢』179～180巻、2016年。

□論説：「カントの政治思想における世界知と判断力」、単著、『産大法学』53巻、2019年。

最近の研究業績

□学会報告：「カント政治思想における「実践的判断力」の意義」、単独報告、政治思想学会、2016年。

□論説：「カントの「政治地理学」：予備的考察」、単著、『産大法学』50巻、2017年。

□研究テーマ

イマヌエル・カントの政治思想

□研究の取組み

イマヌエル・カント（Immanuel Kant 1724-1804）の政治思想における、政治的判断力の重要性を明らかにしようとしている。彼の「政治」概念を「実践的判断力」によって担われるものであると解釈し、このことから彼の政治思想の全体を整合的に解釈することを目指す。

カントの「真の政治」とは、道徳法則に基づく「法論」を実地において執行することであり、特に「最善の体制」を実現することである。そして、この「最善の体制」たる「共和的体制」や「根源的契約」の考察を以てカントの政治思想とみなす解釈が一般的であった。ロールズをはじめとする現代リベラリズム政治理論におけるカントの引用・応用においてもこの解釈がおおむね前提となっている。しかしカントの「真の政治」の特徴は、単に『法論の形而上学的定礎』の理想的国家のみから明らかにできない。現実から理想的国家へ向けての「移行」という側面が重要だからである（「最善の体制」への「持続的な接近」、「おかれた状況」における「改革」）。

他方、「法の形而上学」以外に光を当てる解釈の試み、すなわち、『判断力批判』を中心とする立場も確かに既に存在する。特にハンナ・アーレントに代表されるその主張は、カントの「反省的判断力」は、(1)「特殊なもの」に係わること、(2)人間の複数性・社交性に係わること、という点において彼らの考える「政治的なもの」・「政治的判断力」に合致するというものである。確かに、カントの「政治」概念からしても、その中心に「判断力」を据えることは妥当である。「判断力」は「特殊を普遍のもとに包摂する能力」であり、

この普遍的原理に還元しつくされないという位置づけは、「理論的な法論」ではなく「執行する法論」たる「政治」の位置づけに合致している。だが彼らは主に「美学的判断力」にフォーカスしており、「政治」を説明するものとしては不十分である。

ではカントの「政治」概念に対応した判断力とは何であろうか。それは、道徳の根本原理たる道徳法則を、経験・自然に属する具体的な行為へと適用する「実践的判断力」である。この「実践的判断力」によるカントの「政治」実践者が、そのおかれた政治的現実をいかに把握し、政治実践に反映させる過程・構造を具体的に明らかにする。

またこの探求によって得られた成果を元に、さらに、(1)歴史哲学が彼の政治思想において持つ意義、(2)公共的な議論や公衆が「政治」とどのような関係を持つのかという問題にも、新たな知見が得られると期待している。歴史哲学も公衆もともに政治的な事柄に関する「判断」が問題とされているからである。

この、カント政治思想における、純粋な道徳的理念と現実との接点にスポットライトを当てる研究は、大学で理論を学んだあと、実践の舞台たる世界へと飛び出していく、法学・政治学を学ぶ学生に対する教育のあり方を考える上でも、有意義な手がかりを与えてくれるものと信じている。